

反障害通信

20. 3. 3

90 号

反差別—反国家主義—反資本主義の運動を！

反差別ということの大切さ

うそとごまかしの政治がなぜ続いていくのだろうかと考え、「通信」88の読書メモでとりあげた『壁の向こうの住民たち』のはなしが参考になります。まさに、いろいろ被害(それを被差別としても読み解けるのですが)を受けるひとたちが、さらに差別を転化していく構造があります。その中で差別が再生産され、また差別の構造が維持・拡大されていくのです。

今、1%のひとの99%の支配と言われるような格差の広がりも、累進課税の軽減や法人税減税、消費税率アップというような、どう考えてもおかしいようなことが進んでいくことも、「上を夢見、下の現実を見て自分が優位感にひたる」というところで維持されていくのです。アメリカンドリームなど、現実を押しさえれば、打ち捨てることなのですが、未だに幻想が続いていきます。その裏返しとして「自己責任」の名の下に抑圧され続けるのです。そんなものにとらわれないで、他者との連帯を図っていくことなのに、差別を転化していく構造の中で、その途を塞いでいくのです。

そして、問題なのは、社会を変革しようとするひとたちの運動が、この差別ということをしちんととらえて来なかったことがあるのです。

国家主義へのとらわれ批判

もうずっと昔の話ですが、田原総一朗というジャーナリストが「日本的対話の貧困」を象徴するような番組「朝まで生テレビ」の中で、「ここでは「愛国心」ということで異論はでないだろうから、それに沿って話をしましょうという」(*)といういつもの強引な司会をしていました。そもそも国家ということへのきちんと押さえがなくて政治が語れるのだろうか、わたしは驚愕していました。もう亡くなりましたが坂本義和という政治学者が、大学の講義の最初に、「国家とは何か」という議論を生徒にさせると、毎年「国家という実体はない」という結論に至るということを書いていました。

国家ということでの排外主義を煽り、そして差別を煽ることさえしながら、国家主義的なことで「国民統合」を図っていこうということがあります。自らの失政などで危機に陥った時の常套手段です。

アベ政治もトランプもプーチンも習近平も、その政治の矛盾の根幹は国家主義です。

国家主義へのとらわれは、国家権力を握っているひとたちだけの話ではありません。社会主義社会的なことを目指していた第2インターナショナルは第一次世界大戦の勃発で、崩壊してしまいました。国家主義——民族主義(この二つの語はナショナリズムとして同時に表現できます)にとらわれた故だとわたしは押さえています。

今回読書メモで、レーニンを取り上げています。レーニンの国家論が、国家の共同幻想的性格をきちんとおさえられず、国家権力の奪取というところで収束し、レーニン国家論は官僚的・軍事的統治機構というところから抜け出せませんでした。それは「ロシア革命」が、そして社会変革を志向する自称「社会主義国家」や党派が瓦解していったことをとらえ返すためには、レーニンが打ち立てた「マルクスレーニン主義」ということのとらえ返しが必要になっています。レーニンは世界革命とのリンクということを考えていました。それを引き継いだとされるスターリンが、一国社会主義建設ということでねじ曲げ、「マルクスレーニン主義」を教条化し、それを多くのひとたち・グループがとり入れてしまったのです。そもそも、レーニンのロシア革命は、20世紀初頭の革命で、当時は帝国の植民地支配まっただ中の時代でした。植民地が政治的独立をそれなりに果たしていく中で、グローバル化が世界を覆う時代になって、それだからこそ、資本主義はその体制を維持していくための、そしてその必須条件としてある飽くなき利潤の追求のために、継続的本源的蓄積のために、差別をその基本的構造として組み込む必要があります、その社会は「国民国家」として排外主義的なことを煽っていく必要に迫られているのです。そこでの国家主義です。今、レーニンの武装蜂起の革命論が描けないなかで、もし、軍事的なことが必要になるとすれば、武装的右翼やファシストのクーデターへの対抗だともいえるのですが、その運動の根幹が、国家主義であることを押さえれば、今、必要になっているのは国家を实体主義的にとらえ国家の存続を前提にした議論よりも、国家の共同幻想的性格をおさえた、国家主義批判の運動が、いま必要になっているのだといえます。

反資本主義

さて、今の社会のさまざまな矛盾は、まさに資本主義による矛盾として押さええます。資本主義が行き詰まっているからこそ、国家主義的な政治が覆っているともいえることではないかとも思えます。核軍縮や軍事衝突がなくせないのは、資本主義の危機を国家主義的に乗り切ろうとすることがあるともいえます。そして環境破壊の危機的状況が深刻化していくことは、資本主義の「我が亡き後に洪水は来たれ」という精神を実行しているゆえんです。今や、反資本主義を掲げて運動を進めていくときなのに、社会変革を目指した勢力は、過去の運動のきちんとした総括をなしえず、またそのこととも関連して、きちんとした情勢分析をなしえず、反資本主義の運動のうねりをつくりだし得ていません。いまこそ、きちんとした総括と、方針提起が必要になっているのだと思います。

まとめ

そのことは、差別ということ 키워ドにして、この社会——資本主義社会の分析を成しきり、国家主義として表れてくることに対峙する、反差別——反国家主義——反資本主義の運動の創出が必要になっているのだといえます。

*こういうことに反対しそうなのは、当時は社民党だけでしたが、そのときは参加していませんでした。

(み)

(「反差別原論」への断章) (18) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 90 号」アップ(20/3/3)
- ◆「反障害—反差別研究会のホームページ」メインホームページのトップページの I の「ホームページの見方・検索の仕方」という項目を作り、アクセスしやすいようにしました。ちょっと校正をして、読みやすくしました。メインホームページは一応まとめえた文を掲載するようにしました。
- ◆「反差別資料室 A」を新しくつくりました。A はアーカイブです。「吃音」に関することや、フェミニズム関係の学習をしていたときの文や障害問題で論形成をしていっていた時の論攷を載せています。論的な深化を軸にしている今よりも分かりやすくなっているかもしれません。参考にしてください。
- ◆サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表を、昨年度末までに新しく購入した本、読書した本の文献表を入れ込み、リニューアルしました。「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。案内の文を少し読みやすくしました。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も PDF で文書を貼り付けているのですが、貼り付けた時には読めていたのが、「Forbidden」(「禁止された」)となっているところがあります。いろいろ試行錯誤しているのですが、まだ解決していません。とりあえず、読んでもらえる方はメール添付か、場合によって DVD などの他のメディアの郵送などで対処します。横書き版は最後、縦書き版では 2P の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆母の介護の反省記「ソフトクリムのようなウンコの話—母の介護の記録と反省から介護労苦論批判のために—」をアップしました。表題も含め、まだ迷い続けているのですが、いろんな意味で必要性を考えとりあえずのアップです。

読書メモ

今回レーニン特集です。実は読みながら、問題の所在の深さを感じ、もっと細かい読み込みと読書メモの必要性を感じているのですが、むしろ批判的観点での読み込み、先を急ぎます。とりあえず、このくらいでのメモです。誰かと学習会をしたいのかも考えています。

たわしの読書メモ・・ブログ 525

・レーニン「資本主義の最高段階としての帝国主義」(『世界の名著〈第 52〉レーニン』中央公論社 1966 所収)

この本は「マルクス主義」関係で最初に読んだ 2 冊目の本、一冊目は次の読書メモでとりあげる『国家と革命』です。この 2 冊はほぼ同時期に読んだのですが、読んでしばらくして、日本でスターリン批判をしたひとのひとり(日本のスターリン主義批判は世界に先駆けていたという話もあります)、三浦つとむの『レーニンから疑え』を読み、そもそもわたしは全共闘的な「自己否定の論理」のようなところで、インテリゲンチヤの前衛党論のようなところへの違和があり、「レーニンなんか」という思いを持ってしまいました。で、その後のレーニン学習は、差別の問題関係の学習過程で、「民族自決権」に関する本を 2 冊読

んではいたのですが、とりわけレーニン主義の核心的などと言われ、運動論的組織論的論攷は読まずじまいでいました。で、そもそも現在の社会変革志向の運動の衰退は、過去の運動の総括をきちんとしなしていないからだという思いを強くし、そして、日本の左翼的政治党派のほとんどがとらわれた「マルクスレーニン主義」ということへの批判が必要ではないかという思いを抱き始め、レーニンの第二次学習をしていました。読書メモ 423～433あたりです。で、まだ結論的なことを書かかぬまま、第三次学習です。で、レーニンの必読書とされる本、2冊の再読です。ちょっと誤解をうみそうなことを書いたので、断り書きをしておきますが、わたしはサルトルやデリダも言っているように、「マルクスの思想は現代社会(資本主義社会)で乗り越え不可能な思想」と思っています。ですので、わたしの思想のベースにマルクスがあるとは自認しています。だから、「わたしはマルクス派」という言い方はします。ですが、ひとをカリスマ的にもちあげる、ひとの名前を冠した〇〇主義という言い方は、批判的な意味を込めるときにしか使わないようにしています。マルクスとレーニンは一応切り離すことですが、左翼のほとんどの党が、「マルクスレーニン主義」を自称するかその流れの中にありました。ですから、批判的な意味をこめて「マルクスレーニン主義」と言う言葉は使っています。

さて、話をこの本に戻します。再読と書きましたが、最初読んだのは岩波文庫の『帝国主義—資本主義の最高の段階としての』か、国民文庫です。今回、岩波文庫で読もうとしていたのですが、タイトルにあるように、『世界の名著〈第52〉レーニン』中央公論社1966を使いました。リード文を書いた江口朴郎さん(ブログ423・江口朴郎「レーニンと現代の課題」(『世界の名著〈第52〉レーニン』中央公論社1966所収))が文の最後に、「後記」として岩波や国民文庫は第四版で、この訳は第五版で、「スターリンの時代に出された第四版の欠陥を改め、新たに多くの資料をおぎなった、現在見られる最も完全な版である。」52Pと書いています。スターリンは、反対派との論争過程で、原書を改ざんしたということは有名なことです。で、これを使いました。

さて、そもそも「帝国主義」ということば自体の使い方が、変わってきています。レーニン自体が、この本の中でも、「資本主義的帝国主義」という言葉で、「帝国主義」という言葉が別の使われ方があるというニュアンスを出しています。ひとつ前の読書メモの本の共著者のウォーラステインが「世界システム論」の中で、「帝国主義」ということをアジア的専制国家の侵略的支配という脈絡に限定した使い方を提起しています。そのことがかなり浸透して、先進資本主義(世界システム論では「中枢国」)の後進国(同じく「周辺国」)支配という意味では「帝国主義」ということばは使われなくなっています。更にネグリ／ハートは、訳語ですが「<帝国>」という表記を使い出して、さらに「帝国主義」という言葉が使われなくなってきました。

そもそも、レーニンの評価の一つとして、マルクスはその時代の制約性として「資本主義の最高段階として帝国主義」ということを押さえていなかった不備を、レーニンは、補足し新しく展開したのだという事がありました。ですが、今日的にとらえると、レーニンの「帝国主義論」は、侵略と植民地時代の支配の形態で、戦後の民族解放闘争の中で、ほとんどの国が植民地支配を脱し(「新植民地主義」という言葉を出すひとはいますが)、グローバリゼーションというところで、多国籍企業という形の資本の輸出が、もはや「輸出」

という概念を解体するほどますます進み、レーニンの時代は金融—銀行支配ということがあったのですが、株式会社の金集めの形態も多様化し、多国籍企業自体が大きくふくらみ、ヘッジファンドというところでの株式操作も出て来、そして国家が金利の操作や、年金などの公的資金を株価操作や公債の売買に使うという禁じ手も使い出すほど、「レーニンの「帝国主義論」も古い」となっているのだと思います。もちろん、レーニンがマルクスの不備ということで指摘していたこともマルクスは一応出していたこと、それと同じように、レーニンがこの著の中で出していたことは、基本的枠組みとしてまた有効性があることはあるのですが、「帝国主義」的なことと別の可能性を当時としてはありえないとしていたことが、現在的に進行している面もあるようです。さて、レーニンにはそもそもロシア的な資本主義の発展を押さえたブログ 433 でとりあげた・レーニン『ロシアにおける資本主義の発展(上)(中)(下)』岩波書店(岩波文庫) 1978-81 があります。この本は、そこからさらに展開し、カルテル—シンジケート—トラストという「独占」をとらえ、侵略戦争と植民地支配という「帝国主義」を押さえた論攷です。

さて、ここで押さえておきたいことは、レーニンの「帝国主義論」と同時代に出された、ローザ・ルクセンブルクのレーニンの「帝国主義論」に対置された、「資本蓄積論」の「継続的本源的蓄積論」です。そこから、世界システム論やネグリ／ハートの『<帝国>』あたりにつながっていつているのですが、ネグリ／ハートは国民国家の過小評価に陥っています。それらのことをわたしは反差別論として読み解こうとしていています。とても、現代経済学の本格的学習まで手をひろげられそうにはないのですが、誰も反差別論からの掘り下げたコミットメントをしてくれません。ともかく、基礎的対話くらいはなしえたいとは考えたりしています。

さて、切り抜きメモを残し、その中でもう少し対話を試みます。

「この国では、大工業における独占の誕生に集荷がおよぼす影響は、結晶体のような純粋さであらわれている」 293-4P→これには訳者注がついていて、注(1)時代とともに変化する歴史社会の法則に対して、恒久不変の法則をさす。」 295P・・・これは社会的関係と自然的関係としてとらえかえすことができ、まさに「社会的関係を自然的関係としてとらえる」という錯認としてのマルクスの物象化論の指摘とつながっている、とわたしサイドで読み込みました。

「独占体の歴史を基本的に総括すると、結局つぎのとおりとなる。／(1) 一八六〇年代と一八七〇年代—自由競争の発展の頂点。独占体は、かろうじて認めうる萌芽でしかない。／(2) 一八七三年の恐慌以後。長期にわたるカルテルの発展期だが、カルテルはなお例外的存在である。それはなお、永続的なものではなく、一時的な現象である。／(3)十九世紀末の紅葉と一九〇〇～〇三年の恐慌。カルテルは、経済的生活全体の基礎の一つになっていく。資本主義は、帝国主義に転化した。」 296P

「独占者の団体が「組織」づくりに用いる現代的な、最新の、文明的な闘争手段の一覧表を、ざっとでも見ておくと、教えられることが多い。／(1)原料の剥奪／(2)「同盟」による労働力の剥奪／(3)輸送の剥奪／(4)販路の剥奪／(5)もっぱらカルテルとのみ取引きするという、購買者との協定／(6)計画的な価格引き下げ／(7)信用の剥奪／(8)ボイコットの宣言」(注解省略) 300P

「細かい網の目のような水路が、国中をおおい、すべての資本と貨幣収入を集中し、数千数万の分散した経営を単一の全国的な資本主義経済へと、さらには、世界資本主義経済へと、転化させつつある」 306P・・・銀行資本の支配の水路

「銀行が幾人かの資本家のために当座勘定の口座をひらくのは、純然たる技術的な業務、あるいは、もっぱら補助的な業務をおこなうことであるかのようだ。だが、この業務が巨大な規模にまで成長すると、全資本主義社会の商工業取引が、一握りの独占者に従属させられることになる。」 308P

「自由競争の支配する古い資本主義に独占の支配する新しい資本主義がとって代わったことは、一つには、証券取引所の意義が低下したことにあらわれている。」 312P・・・これは銀行支配ということなのですが、現代的には株式による株の持ち合いとか、ヘッジファンドの登場とか、巨大な多国籍企業の登場とか、国による公的資金の株株式への投入、金利操作とか、銀行支配という側面は、レーニンの時代に比べてすくなくなっているのではと見えるのですが。

「銀行と産業との「人的結合」を補っているのは、これらの銀行や会社と政府との「人的結合」だ。・・・したがって、資本主義的大独占をいわばつくりだし、仕上げるのは、あらゆる「自然的」および「超自然的」な方法によって全速力で進められているのだ。」 316P・・・「自然的」——まさに物象化論的把握

「資本の輸出国は、比喩的な意味では、世界を自分たちのあいだで分割した。しかし金融資本は、まさに世界の直接的分割をもたらしたのだ。」 140P

「V 資本家団体による世界の分割」 340-9P・・・電気と石油、そして運輸、鉄道からレール製鉄業

「資本主義国の植民地政策化がわが地球上のあいている土地の侵略を完了したという意味だ。だから、このあとに来るのは再分割だけだ。」 350P・・・再分割として二度の帝国主義間戦争としての世界大戦、そして植民地支配からの独立闘争を経ての「帝国主義論」から世界システム論への転換やネグリ／ハートの「<帝国>」概念の登場

「したがって、独占資本主義段階への、金融資本への資本主義の移行が、世界分割をめぐる闘争の激化と結びついているということは疑いのない事実だ。」 351-2P

「われわれは、ここから一八七六年をとる。これはすこぶる選択の当を得た時点だ。なぜなら、全体として見れば、まさにこの時期までに、独占以前の段階の西ヨーロッパ資本主義の発展は完了した、と見ることができるからだ。」 354P

「こうして、第14表(354P)のような総括表が得られる。／この表からは、十九世紀と二十世紀の境に世界の分割が「完了した」のが一目瞭然である。」 355P

「植民地政策と帝国主義は、資本主義の最新の段階以前にも存在したし、資本主義以前も存在した。奴隷制に立脚したローマは、植民地政策を推進して帝国主義を実現した。しかし、社会経済的構成体の根本的な相違を忘れて、それを軽視して、帝国主義について「一般的」に論じるなら、「大ローマと大ブリテン」を比較するというような、空疎このうえない俗論や駄ぼらになってしまうのは避けられない。資本主義の従来の諸段階の資本主義的植民地政策でさえ、金融資本の植民地政策とは本質的に異なっている。」 356-7P・・・資本主義以前の帝国主義と資本主義的植民地支配の帝国主義、金融資本支配下の植民地主義的

帝国主義と、植民地からの独立後のグローバリゼーション下の「帝国主義」——これは、世界システム論では、(アジア的) 帝国主義、グローバリゼーション下の中枢国—周辺国という二分法になっています。ネグリ／ハートの「<帝国>」概念は、これらを架橋する概念。

訳注(1)「レーニン『帝国主義ノート』(第四版、三十九巻、七〇〇ページ)で、世界の国々を、(1)金銭的にも政治的にも自立した国、(2)金銭的には自立していないが、政治的には自立している国、(3)半植民地、(4)植民地と政治的従属国、の四つのグループに分けている。第一のグループにはイギリス、ドイツ、フランス、アメリカがあげられているが、第二のグループにはロシア、オーストリア、トルコ、西ヨーロッパの小国、日本、中南米の一部があげられている。だから、ここではアルゼンチンとかポルトガルが出されているが、ほんとうはロシアのことを頭においているのである。」 361P

(帝国主義のついでに)「帝国主義は、資本主義一般の基本的属性の発展、その直接の継承として成長した。しかし、資本主義がついに資本主義的帝国主義になったのは、その発展の、きわめて高度な一定の段階でのことであって、資本主義のいくつかの基本的属性がその対立物に転化しはじめ、資本主義からより高次の社会経済的制度へ移る過渡期の諸特徴があらゆる面で形成され、表面化したときのことである。／この過程において経済面で基本的なことは、資本主義的独占が資本的自由競争にとって代わったことである。自由競争は資本主義と商品生産一般の基本的属性であり、独占は自由競争の直接の対立物である。ところが、この自由競争が、われわれの眼前で独占に転化しはじめた。すなわち、大規模生産をつくりだして小生産を駆逐し、大規模生産を巨大規模の生産で置き換え、生産と資本の集積を推し進め、そこから独占体が、つまり、カルテル、シンジケート、トラスト、そしてこれらと融合し数十億の金を動かしている十行かそこらの銀行の資本が、成長したし、いまま成長しつつあるところまで到達させたのだ。そして同時に、独占は、自由競争のなかから成長しながらも自由競争を排除せず、自由競争のうえに、これと並んで存在し、このことによって一連の、とくに鋭くはげしい矛盾、摩擦、衝突を生みだしている。独占は、資本主義からより高次の体制への過渡なのである。／もし帝国主義をできるだけかんたんに定義する必要があるとすれば、帝国主義とは資本主義の独占段階のことだと言うべきだろう。この定義には、最も主要なものが含まれている。というのは、一方では、金融資本とは、産業家の独占団体の(産業)資本と融合した、独占的に少数の巨大銀行の銀行資本だからであり、他方では、世界の分割とは、まだどの資本主義強国によっても侵略されていない領域へ自由に拡張される植民政策から、くまなく分割しつくした地球上の領土を独占的に領有する植民地政策への移行だからである。」 362P

「あらゆる定義一般のもつ条件つきで相対的意義を忘れずに、つぎの五つの基本的標識を含むような、帝国主義の提起を与えねばならない。／(1)生産と資本の集積が高度の発展段階に達して、経済生活で決定的役割を演じる独占体をつくりだしたこと。／(2)銀行資本が産業資本と融合し、この「金融資本」を基礎として金融寡頭制がつくりだされたこと。／(3)商品輸出と区別される資本輸出が、とくに重要な意義をおびること。／(4)資本家の国際的独占団体が形成され、世界を分割していくこと。／(5)最大の資本主義列強による地球の領土的分割が完了したこと。／帝国主義とは、独占体と金融資本の支配が成立し、資本輸出がきわだった意義をおびるにいたり、国際的トラストによる世界の分割が始まり、最大の

資本主義諸国による地球の全領土分割が完了した、という発展段階の資本主義のことである。」 363P

「もし基本的な純経済的概念[いま述べた (前の文章) 定義はこれに限定したものである]だけでなく、資本主義一般に対して資本主義のこの段階が占める歴史的な位置とか、労働運動における二つの基本的な傾向と帝国主義との関係とかを考慮に入れるならば、帝国主義にはこれとは異なる定義を下すことができるし、下さなければならない。ただ、ここでは、右に (横書きでは上に) 指摘した意味で理解される帝国主義が、疑いもなく、資本主義の特殊な発展段階をなすということに、注意しておかねばならない。」 363P

「帝国主義にとってまさに特徴なのは産業資本主義ではなくて、金融資本主義なのだ。」

364P

「カウツキーが帝国主義の政治を帝国主義の経済から切り離して、領土併合を金融資本の「好む」政策だと解説し、それに対置される別のブルジョワ的政策が同じ金融資本の土台に立っても可能であるかのように主張している点にあるのだ。そういうことなら、経済における独占は、政治における独占ではない、暴力的ではない、侵略的ではない行動様式と両立しうるということになる。つまりは、まさに金融資本の時代に完了し、最大の資本主義国家間の競争の現代の形態の独自性基礎をなしている地球の領土的分割は、帝国主義的でない政策と、両立しうるということになるのだ。」 366-7P・・・カウツキーの分析はその時代には間違えていたとしても、植民地が独立した現代のグローバリゼーションの時代の経済体制ということでは、当てはまることがあるのでは?——単一の中枢国による植民地ではなくて、グローバリゼーションの時代の多国籍企業の支配も含んだ経済従属体制というところでの政治的従属関係となっている。

「ところが、二十世紀の初めにあたる歴史=具体的な時代としての金融資本の時代の「純経済的」条件について語るのならば、「超帝国主義」という死んだ抽象[これはもっぱら、存在している諸矛盾の深刻さから注意をそらすという極反動の目的に役だつものだ]に対する最良の答えは、現代社会の具体的=経済的現実をそれに対置することである。」 368P・・・前のメモと同じ

「金利生活者の収入が、この世界一の「商業国」(「大英帝国」)の貿易収入を五倍も上まわっている! ここにこそ、帝国主義と帝国主義的寄生性の本質があるのだ。/「金利生活者国家[Rentnerstaat]あるいは高利貸国家という概念が、帝国主義に関する経済的文献のなかで一般的に用いられるようになりつつあるのは、このためである。世界は一握りの高利貸国家と圧倒的多数の債務者国家とに分裂した。」 374P

「この著者 (ホブスン) の見解によれば、つぎの2種類の事情が旧来の諸帝国の力を弱めてきた。すなわち、/ (1)「経済的寄生性」/ (2)従属的諸民族からなる軍隊の編成/である。」

376P

「帝国主義本国 (中枢国)」の第一産業と第二次産業の空洞化 377P

「ヨーロッパ合衆国」 378P——訳注(1)「大戦の初期にポリシェヴィキのなかで「共和制的ヨーロッパ合衆国」というスローガン出された。レーニンをはじめはそれを支持したが、一九一五年なかばになり、資本主義、帝国主義に手をふれないうヨーロッパ合衆国を追求するのは誤りだと、これをしりぞけた。レーニンは「社会主義的世界合衆国」を考えてい

る。」 379P・・・そのようなことが成立したら、国家という概念ではなくなるのでは？

「ここでは、原因と結果がはっきりと指摘されている。／原因は、(1)この国による全世界の搾取、(2)世界市場におけるその独占的地位、(3)その植民地独占、である。／結果は、(1)イギリス・プロレタリアートの一部のブルジョワ化、(2)プロレタリアートの一部がブルジョワジーに買収されているか、すくなくとも彼らから金をもらっている連中の指導に甘んじていること、である。」 382P

「だから日和見主義は、こんにちでは、十九世紀後半のイギリスで勝利を得たように、数十年の長きに渡って一国の労働運動を完全に支配することはできない。しかし、日和見主義は、幾多の国で、成熟しきって熟しすぎ、さらには腐りはて、社会排外主義となって、ブルジョワ政治と完全に融合してしまったのである。」 382P・・・レーニンの時代の「中樞国」では、「融合」は可能だったとしても、グローバリゼーションの時代には、「融合」は可能なのか？ 「労働貴族」の没落

「現在のいわゆるドイツ「社会民主」党の幹部は、正当にも「社会帝国主義者」——すなわち、口先では社会主義者、実際は帝国主義者——という名前と呼ばれているが、ホブソンは、速くも一九〇二年に、イギリスには日和見主義的な「フェビアン協会」に属する「フェビアン帝国主義者が存在している、と指摘していた。」 383-4P・・・いろいろな「帝国主義者」

「外国の支配下にあるアジア・アフリカ・ヨーロッパの諸民族の代表者が集まって、一九一〇年六月二十八～三十日にひらかれた従属民族人種会議」 384P——訳注(3)「ロンドンのウェストミンスターで開かれた。エジプト、インド、モロッコ、グルジア、アフリカの黒人、南米のインディオ、アイルランド、ポーランドの代表が集まった。」 385P・・・この時代から反「帝国主義」運動が始まっていることに留意—

「帝国主義の諸矛盾を分析してその深刻さをあばきだすのではなく、これらの諸矛盾を回避し、言いがれをしようという改良主義的な「無邪気な願望」——これが、われわれの見る唯一のものなのだ。」 386-7P

「輸出の上昇はまぎれもなく金融資本の詐欺的行為と結びついているのであり、この金融資本はブルジョワ道徳などすこしも気にせず、一頭の牛からも二枚の皮をはぐのである。つまり、最初は、借款から利益を得、つぎは、借款がクルップの製品や製鋼シンジケートの鉄道用材の買い付け等々にあてられるとき、その同じ借款から利益を得るわけである。」 391P・・・ODAとか、世銀支配とかにも繋がる常套手段

「帝国主義は金融資本と独占の時代であり、この金融資本と独占は、いたるところに、自由を求める渴望ではなく、支配を求める渴望をもってまわる。」 395P

「ここでとくに、問題としているこの時代の特徴をなす独占の主要な四つの現象を、指摘しておかねばならない。」——「第一に、独占は、生産の集積のひじょうに高度な発展の段階において生産の集積のなかから成長した。これは、資本家たちの独占団体——カルテル、シンジケート、トラストである。」——「第二に、独占体は、最も重要な原料資源の略奪を強化させた。」——「第三に、独占は銀行から成長した。銀行はひかえめな仲介的企業から金融資本の独占者に転化した。」——「第四に、独占は植民地政策から成長した。」 397-8P
「この点で何よりも危険なのは、帝国主義との闘争は、日和見主義との闘争と切っても切

れないように結びつけられていなければ、空虚な、偽りの空文句にすぎないということを、理解したがない人々である。」400P

「この点で示唆ぶかいのは、「からみあい」や「や「孤立性の欠如」等々が、最新の資本主義について記述しているブルジョワ経済学者たちの流行語となっている。」——「それでは、この「からみあい」という言葉は何をあらわしているのか。それは、われわれの眼前で進行している過程の最も目につく特徴だけをつかんでいるにすぎない。それは、観察者が木を見て森を見ないことを示している。それは、外面的なもの、偶然的なもの、無秩序なものを、ただそのまま書き写していただけたことだ。それは、素材に圧倒されて、その意味も重要性もさっぱりわかっていない人間であるあることを暴露している。」——「このようなときには、われわれの眼前にあるものは、生産の社会化なのであって、たんなる「からみあい」などではけっしてないということ、私経済的關係および私的所有者の關係は、もはやその内容にそぐわない外皮をなしていること、そしてこの外皮はこれを取り除くのが人為的に引き延ばされるばあいにはかならず腐敗するという、それは比較的長期間[最悪のばあい、日和見主義の腫れものを治してしまうのが遅れるばあいには]腐敗状態のままであることがあるが、それでもやはり、結局はかならず取り除かれるであろうということが、明白になるのである。」401-2P・・・ブルジョワ・イデオログ達の無理解と、ものごとをあいまいにさせる目くらましの虚言

たわしの読書メモ・・・ブログ 526

・レーニン「国家と革命」(『世界の名著〈第52〉レーニン』中央公論社1966所収)

この本は確か岩波文庫で読んでいた本(国民文庫だったかもしれません)。実はわたしが、「マルクス主義」関係で一番最初に読んだ本です。大学で学費値上げ阻止闘争があり、クラス討論に参加していた関係で、学生自治会と接触があり、その自治会メンバーから勧められた本です。すぐに、そのグループとは距離を置き、三浦つとむの『レーニンから疑え』とかの学習会に参加していました。で、レーニンに懐疑的な思いを抱き続けていたのですが、レーニン批判から「マルクス・レーニン主義」批判をしていく必要にせまられ、前回の第二次レーニン学習をしました。今回、前回メモに続いてレーニン第三次学習です。

さて、レーニンの本を読んでいると、「ミイラ取りがミイラになる」ということに陥るような感覚にとらわれる思いも出てくるのです。レーニンは論争のひとで、現実的運動の中での運動をもっと直裁に言えば革命をどう進めるかというところで、さまざまな論争をし、学習も積み重ねたひとで、その論の鋭さは論敵にされたひとがたじろいでいく様が思い浮かぶようです。

さて、この本は主要に二つの論点がでて来ます。それはマルクス／エンゲルスのアナーキストとの論争のなかでの国家を巡る論争を踏まえて、国家の廃絶か国家の死滅かということ。とりわけ、「それまでの官僚組織をそのまま利用することはできない」ということを巡る議論。そして、プロレタリア独裁論です。

レーニン批判は、マルクス／エンゲルスの文献的とらえ返しの中で、レーニンが読めていなかったところのマルクスの論争からレーニン批判がいくつか出ています。ひとつは、

レーニン国家論は国家とは官僚機構と軍・警察機構であるということなのですが、レーニンは『ドイツイデオロギー』を読めていず、マルクス／エンゲルスの国家＝共同幻想というとらえ返しをしていることを知らなかったという批判があります。そのあたりを検証してみます。マルクス／エンゲルスが「まさしく特殊的利害と共同的利害のとのこの矛盾から、共同的利害は国家として、現実の個別的利害ならびに全体的利害から切り離された自立的な姿をとる。」67P←ここにエンゲルスの書き込み「そして、同時に幻想的な共同性として」68P、「国家の内部における一切の闘争は、さまざまな階級間の現実的な闘争がそういう形態をとって行われるところの幻想的な諸形態にすぎない。」68P←ここにエンゲルスの書き込み「そもそも、普遍的なものというのは共同的なものの幻想的な形態なのだ」69P、「従来の共同社会の代用物——国家その他——においては、人格的自由は、支配階級の中で育成された諸個人にとってしか、しかも彼らが支配階級の個人でいられた間しか、実存しなかった。これまで諸個人がそこへと結合した見掛け上の共同社会は、常に諸個人に対して自立化した。同時にまたそれは一階級が他階級に対抗して結合したものだだったので、被支配階級にとってはまったく幻想的な共同社会であったばかりか、新たな桎梏でもあった。現実的な共同社会においては、諸個人は彼らの連合（アソツイアツイオーンのルビ）において、かつ連合によって、同時に彼らの自由を手に入れる。」175P（マルクス／エンゲルス（廣松渉訳／小林昌人補訳）『ドイツ・イデオロギー 新編輯版』2002 岩波文庫、引用文は完成体で、実際は、書き込み、校正前の原稿、二人の書き込みの区別までしています。ちなみに廣松渉訳以前の岩波文庫の古在由重訳では、順に44P、114P、古在訳では、「共同社会」は「共同体」、こちらが古いので「国家＝幻想共同体論」という言い方が流布しています。このあたりは廣松さんは物象化ということの問題にしているので「共同体」という物象化された表現の訳をもちいていないのではとわたしは考えています。ただし、物象化されたものとしてあらわれると言う意味では「共同体」という言い方もありなのかもしれませんが。レーニンは軍事的に反革命にどう対峙するのかというところも含んで武装蜂起論を立てているのですが、そのあたりは日常的な生活の中で資本主義的なイデオロギーにとらわれていくことをどうするのか、そして更に、民族という共同幻想（物象化）をその基礎をつくる土台から押さえたところの国家論をどうするのかという問題があります。国家という概念からいかに脱していくのかという反国家主義の問題も出てくるのです。

もうひとつは、発展史観といわれていることで、レーニンはこの本の中でも、共産主義は資本主義の後にくるものだというとらえ返しをしているのですが、マルクスは「資本論草稿」を書く中で、その中にも一部出てくるのですが、古代社会ノートとかアジア的生産様式論の研究をしながら、共産主義的なことを過去の歴史の中に探し出す作業をしていました。単線の発展史観の批判も出て来ているのです。

さらに、レーニン時代は「資本主義的帝国主義」の時代で、植民地支配が世界を覆った時代だったのですが、今は、植民地が一応次から次に独立していき、グローバリゼーションが世界を覆った時代、それでも、国民国家が資本主義的支配のために民族排外主義を煽っていく時代、差別を資本主義の継続的本源的蓄積の中に組み込んでいる、その基礎にしている時代なのです。だから国家主義批判が、反差別論が必要になっている時代です。そこで、その国家という共同幻想を撃つことが必要になっているのだとも言えます。レー

ニンの「国家と革命」は、国家権力の奪取ではなく粉砕の上で、それに代わる国家をうち立てるといふ論理なのですが、厳密に言うとも、奪取する、即時的に粉砕なのです。奪取するだけなら、「それまでのできあいの官僚機構は廃棄する」というテーゼに反し、粉砕だけならアナキズム批判ができなくなるのです。それにしても、なぜ、粉砕したことをなぜ、中味を変えらるゝとしても新たにつくる必要があるのかという問題があります。そもそも国家に対置することとしてソヴィエトをつくったはずなのです。これがプロレタリア独裁の機関のはずだったのです。結局、ロシア革命はソヴィエトの機能を停止させました。それはレーニンの中央主権主義に合わぬとしてだと思ふのですが、それが党独裁につながり、結局中味が違ふとしても、国家の建設といふところに入らなければ、官僚的機構にならっていきます。レーニンは、ブルジョア国家とは異なる「官僚」(官僚制とことなるプロ独的「官僚」)の原則を立てました。彼自身はその原則を守らうとしていたやうです。しかし、そもそもネップを導入し、資本主義経済の取り入れをすれば、ブルジョア的官僚制に収束していかざるをえなかつたのではないでしようか？ それがスターリン的官僚機構の水路にならなかつたのではないでしようか？

マルクスのプロ独論はスパンが短いものでした。そしてプロレタリア独裁国家といふ概念はなかつたのではないでしようか？ レーニンは、かなり長い時間プロ独が必要だと押さえていたやうです。もちろん、レーニンはスターリンとの明らかな違ひとして、世界革命への連動として、国家が死滅して行くには、世界革命が必要だとしていて、そもそも国家とは、他国との関係において国家としてあるのであつて、一時的に一国的に定立して(レーニンは一国的なことをスターリンよりもはるかに短いスパンで考へていたやうですが)いく必要を考へていたのかもしれません。

ともかく、ロシア革命がねじ曲げたことの総括をどうするのかわるゝ問題が必要にならっているのです。その総括を他の国でおきたことだとか、自分たちとは路線が違ふといふて総括をサボタージュして、綱領の中のことばを変えらるゝだけでは、むしろ混迷を深めらるゝのです。

さて、この本は未完の本なのです。続きのもくじが訳編集者によらるゝて上げらるゝていますが、そこにはソヴィエトに関する論攷が含まらるゝていたやうです。この文が書かれたのは、まさに革命進行中の1917年の8月とき、これから蜂起に向かつて多忙になる中で、続きは書かれなかつたといふ注がつらるゝているのですが、ソヴィエトに対するレーニンの考へが変らるゝなかで、ソヴィエト自体が消滅し、続きは書かれなかつたのではないかとわたしは押さえていたのですが、何かレーニンの手紙なり、文が残らるゝているのでしようか？ そこまでとて追えません。

さて、この後、わたしのレーニン学習は哲学的論攷二冊に入らるゝていきます。レーニンは、晩年のエンゲルスが「マルクス主義」のわかりやうい解説をしようとして、図式化に陥らるゝ、「ヘーゲルへの先祖返らるゝ」に陥らるゝたと批判されらるゝていて、その中で「対話による深化としての道行き」としての弁証法を、法則としての物象化に陥らるゝてとらえ、弁証法の三法則とか出らるゝていて、それをレーニンも引き継いでいるのです。そのあたり、レーニンが『唯物論と経験批判論』でとりあげらるゝているマッハ批判を書らるゝていて、実は、わたしが哲学的にいろいろとりいれようとしていた廣松渉さんが、マッハ哲学をニュートン力学から量子力学への架

橋をしたひとりとして押さえていて、マッハの訳本に解説を書いています。そのあたりからのレーニンの哲学的なところへのとらえ返しもしてみたいと思っています。もう一冊は『哲学ノート』。

それから、差別の問題に関して、レーニンとローザ・ルクセンブルクの論争が有名で、これは一般的にはレーニンの民族自決権が正しいとレーニンに軍配が上がったとされているのですが、わたしはこの国家論なりレーニンの中央集権制なりから再度とらえ返しをしてみたいと思っています。そのためにローザ・ルクセンブルクの本に当たります。それから、コルシュや従属理論の積ん読している本を読み解いていきます。そこから、ドキュメント現代史で革命論の学習に戻ります。その間に障害問題の本やエコロジー関係の本を挟んでいきます。

さて、切り抜きを残しておきます。実は、この本は大切さを考えると、「レーニンノート」とか作り、そのなかで、この本の精細な切り抜きやコメントを書くことも考えたのですが、先を急ぎ時間がありません。簡単な切り抜きメモに留めます。

「国家は、階級対立の非和解性の産物であり、そのあらわれなのだ。国家は、階級対立が客観的に和解しえなくなったとき、まさにその場所に、そのかぎりで、発生するのだ。逆に言えば、国家が存在しているということが、階級対立の非和解性の証明なのだ。」472P・・・
非和解性は共同幻想によって粉飾されていて、民族差別による排外主義で、「国民統合」が図られるのですが、そのあたりの押さえがないのです。むしろレーニンも陥っている国家主義批判の必要性

「マルクスによれば、国家は階級の和解が可能ならば発生しえないものだし、もちこたえることもできないものなのだ。」「マルクスによれば、国家は階級支配の機関、一つの階級が他の階級を抑圧する機関、階級衝突を緩和しつつ階級抑圧を合法化し確固たるものにする「秩序」の創出そのものなのだ。」472P・・・*国家の共同幻想的性格を押さえていません。*

「緩和」ということばにかろうじてそのニュアンスがあります。

「また、国家が社会の上にたち、「みずからをますます社会から疎外してゆく」権力であるとすれば、被抑圧階級の解放は暴力革命なしには不可能なばかりか、支配階級によって作りだされ、そのなかにこの「疎外」を体現している国家権力機関をも廃絶することには不可能だという明白な点が、である。」473P・・・「上にたち」とは何を意味するのか？——「上部構造」？「支配する」という意味、後者ならば共同幻想的性格の欠落

「そして、あらゆる革命が、このような国家装置を破壊することによって、むきだしの階級闘争なるものをわれわれに見せてくれるのであり、支配階級がどんなに、自分に奉仕するように武装した人間の特殊部隊を復活しようと一所懸命になるものである。被抑圧階級がどんなに、搾取者にではなく被搾取者に特別奉仕するこの種の組織を新設しようと一所懸命になるものであるかを、まのあたりに示してくれるのである。」475-6P

「かくして、官吏の神聖不可侵をうたった特別法がいくつもつくりだされることになる。「最も下っぱの警察官」でさえ、クランの首長よりも高い「権威」をもっている。けれども、文明国家の軍司令官ですら、社会から「棒きれをふるって手に入れたわけではない尊敬」をかちえていたクランの長老を、うらやましく思わずにはいられまい。」477P

(エンゲルス)「しかし、例外的に、相闘う階級の力量が伯仲しているとき、国家権力は、

一時的に、外見上の調停者となって、双方の階級に対し、ある程度の独立性をたもつ時期がある。」478P

「このように「富」の全能は、民主共和制のもとでいっそう確固たるものとなるのだ。」

480P・・・「富」とはなにか？ その「富」の共同幻想が国家の共同幻想の元になる。

「階級は、かつてその発生が不可避であったように、消滅もまた不可避となろう。この階級の消滅とともに、国家の消滅も不可避となろう。自由かつ平等な生産者の結合関係を基礎に新たに生産を組織する社会は、全国家機関を、そのばあい当然おかれるべき場所へ移しかえるであろう。すなわち、糸車や青銅の斧と並べて、考古博物館のなかへ。」481P

(エンゲルスの『反デューリング論』第三篇第二章からの長い引用の後)「このような目をみはるばかりに思想豊かなエンゲルスの考察のなかから、現代社会主義諸政党が社会主義思想の真の財産としてとりこんだものといえ、マルクスの国家は「死滅する」という点——無政府主義的な国家「廃止」説とは違う——だけに過ぎぬと断言できる。このようなマルクス主義の刈りこみは、マルクス主義を日和見主義へまでひきずりおろすことを意味する。なぜなら、このような刈り込み「解釈」をすればあとに残るものは、ただゆっくりとした起伏のない漸進的な変化、飛躍と激動の欠除、革命の脱落といった朦朧たる概念のみだからだ。世間一般に流布している、大衆的に——と言ってよければ——理解された国家の「死滅」節は、革命を否定しないまでも、革命をぼやかすことを意味していることは、疑問の余地がない。／この種の「解釈」は、ブルジョワジーにだけ有利な、粗雑きわまりないマルクス主義の歪曲であって、理論的に言えば、さきに全文を引用したエンゲルスの考察の「総括」において指摘されている、もっとも重要な事情や考慮を忘れさせたことに由来するものなのだ。」483P——ここからその「総括」の内容が五点示されています——①

「第一に、エンゲルスは、この考察の冒頭で、プロレタリアートは国家権力を掌握し、「それによって、国家としての国家を廃絶する」と述べている。」483P「ここでエンゲルスが語っているのは、じつは、プロレタリア革命によるブルジョワジーの国家の「廃絶」についてであって、「死滅」(Absterben)という言葉のほうは、社会主義革命後のプロレタリア国家組織の残存物に用いられているのである。エンゲルスによれば、ブルジョワ国家は「死滅」するのではなくて、革命のなかでプロレタリアートによって「廃絶される」のだ。一方、「死滅する」のは、この革命後のプロレタリア国家、あるいは半国家なのだ。」484P②

「第二に、国家は「抑圧するための特殊な権力」だということである。」「ブルジョワジーがプロレタリアートを、つまり一握りの金持が数百万人の勤労者を「抑圧するための特殊な権力」に、プロレタリアートがブルジョワジーを「抑圧するための特殊な権力」がとってかわらなければならない[プロレタリアートの独裁]ということである。「国家としての国家の廃絶」とは、まさにこのことなのだ。」484P③「第三に、エンゲルスが国家の「死滅」と言ったり、その特徴をくっきりと浮かびあがらせて「眠りこみ」(Einschlafen)とさえ言っているのは、まったくの明白かつ正確に、「全社会の何において国家が生産手段を占取してから後の時代、つまり社会主義革命後の時代についてなのである。／この時代の「国家」の政治形態こそ、最も完全な民主主義であることはだれでも知っている。・・・・・・このことが「わからない」者は、民主主義もまた国家であり、それゆえ国家が消滅するとき、民主主義もまた消滅するのだということ、ふかく考えてみたことのない人たちだけ

なのだ」484-5P・・・この民主主義は支配の一形態としての民主主義のこと、レーニンには区別がついているのだろうか？レーニンはプロレタリア国家（の暴力）による反革命の抑圧ということで、民主主義の否定にまで及んでいるようなのです。反革命を抑圧するのは国家ではなく民衆のはずなのです。そこに民主主義があるはずなのです。ここにレーニンの外部注入論的革命、民衆の革命性への懐疑もあり（レーニンはプロレタリアートの革命性を一方で述べていたのですが）、それはスターリンの徹底した懐疑からする管理国家形成へすすんでいったのではないのでしょうか？④「第四に、エンゲルスは、「国家は死滅する」という有名な命題をかかげたあとで、つづけて、この命題は日和見主義者と無政府主義者に対して向けたものだということを具体的に明らかにしている。」485P「あらゆる国家は、被抑圧階級を「抑圧するための特殊な権力」なのだ。だからあらゆる国家は非自由で非人民的なのだ。マルクスとエンゲルスは、「自由な人民国家」が流行のスローガンとなった一八七〇代に、党の同志たちに向かって、このことを何回となく説明している。」486P⑤「第五に、だれもが国家の死滅に関する考察のあることを想起するエンゲルスのこの同じ著作のなかに、暴力革命の意義に関する考察もある。エンゲルスにあっては、暴力革命の役割の歴史的評価は、暴力革命への心からの讃辞となっている。」「暴力とは、新しい社会をはらんでいるあらゆる旧社会の助産婦である。」486P

「暴力革命の不可避性についてのマルクスとエンゲルスの学説は、ブルジョワ国家に関してのことであることはすでに述べたが、以下の叙述でさらにくわしくそのことを示そう。／プロレタリア国家がブルジョワ国家にとってかわること、つまりプロレタリアートの独裁の創出は、「死滅」によっては不可能であり、それは一般的原則では、暴力革命によって初めて可能である。そしてエンゲルスが暴力革命にささげた讃辞は、マルクスの再三にわたる言明とも完全に一致しているのである〔われわれは、暴力革命の不可避性を誇らしく公然と宣明した『哲学の貧困』と『共産党宣言』の結語を思いおこし、また、それからほぼ三十年後の一八七五年、ゴータ綱領の日和見主義に対するマルクスの仮借ない糾弾を思いおこす。〕」488P

「ここに国家問題に関するマルクス主義の最も注目すべき、最も重要な思想の一つ、ほかならぬ「プロレタリアートの独裁」〔マルクスとエンゲルスは、パリ・コミューン以後になって述べるようになった〕（ここに注がついている）の思想が定式化されているのを見るのであり、・・・・・・このうえなく興味ふかい、つぎのような国家の定義を見るのである。「国家とは、すなわち、支配階級として組織されたプロレタリアートである。」490P・・・プロレタリア独裁国家ということ、ただし？ 492Pの二つ目の引用——（ここに注がついている）の注——「この挿入部分（〔 〕のなか）は、レーニンが『国家論ノート』のなかで、「マルクスとエンゲルスが、一八七一年以前に『プロレタリアートの独裁』ということを書いたことがあるかどうかをさがし、調べること。ない！ と思われる。」ということに対応している。じつは、この第Ⅱ章「国家と革命」第3節にあるように、マルクスはすでに一八五二年、ワイデマイヤーあての手紙のなかで「プロレタリアートの独裁」という言葉を使っていた。レーニンがこのことを知ったのは初版刊行後のことであり、そのために第二版でこのことに触れた説が付加されたわけである。」491P

「プロレタリアートにも国家が必要だ——あらゆる日和見主義者、社会排外主義者、カウ

ツキー主義者はこうくりかえしている。彼らは、これこそマルクスの学説だと断言しながら、つぎのことをつけ加えるのを「忘れている」のだ。第一に、マルクスによれば、プロレタリアートにとって必要なのは、ただ死滅しはじめ、また死滅せざるをえないように構築された国家だけだということ。第Ⅱに、勤労者にとって必要なのは「国家」(括弧付き「国家」)、「すなわち、支配階級として組織されたプロレタリアート」だけということ。」

490P

「マルクスが国家問題と社会主義革命の問題に適用した階級闘争の学説は、必然的に、プロレタリアートの政治的支配、プロレタリアートの独裁の承認に、つまり、権力がだれにも分有されておらず、ただ大衆の武装力にのみ依拠しているところの権力に承認にみちびく。」492P・・・被抑圧階級をプロレタリアートとしてだけとらえると、プロレタリアートの独裁が出てくるのですが、今日、マルチチュードとかサバルタンとか出さざるを得なくなった時代には「プロレタリアートの独裁」という論理は出せなくなっているのではないのでしょうか？ 差別というところから総体的にとらえ返していく必要が出てきているのです。

「プロレタリアートに必要なのは国家権力、すなわち、中央集権化された暴力装置であり、搾取者の反抗を弾圧し、また社会主義経済を「組織する」事業において、農民階級、小ブルジョワジー、半プロレタリアートという膨大な住民大衆を指導するための暴力組織なのだ。」492P・・・「指導するための暴力組織」？指導と暴力はアンチノミーのはずなのです。必要なのは「国家」で、国家なのではないのでは？ それが国家になるのは、資本主義国家が存在するところにおいて、国家にならざるをえないのです。だから、レーニンも世界革命の必要性を主張していたはずなのです。逆に言えば、プロ独が国家として出てくるときには、世界革命的には敗北せざるを得なくなるということではないのでしょうか？

「ブルジョワ社会に特有な中央集権化された国家権力は、絶対主義の没落期に発生した。そして、この国家機構にとっては最も特徴的なものは、つぎの二つの制度だった。すなわち、官僚制度と常備軍。」495-6P

「官僚制度と常備軍——これはブルジョワ社会のからだに宿る「寄生体」、ブルジョワ社会をひき裂く内的矛盾によって生み出された「寄生体」、しかも、まさに生命の毛穴を「ふさいでいる」寄生体だ。」496P

「マルクスがどの程度まで厳格に歴史的経験という事実的基礎の上に立っていたかは、彼がこの一八五二年には、まだ廃絶すべき国家機構に代えるに何をもってするかという問題を具体的に提起していないこともわかる。当時まだ、経験からは、このような問題を解決するための材料を得ることはできなかったのだ。そして、この問題が歴史によって日程にのぼることになったのは、それより後の一八七一年のことなのだ。一八五二年の段階において、マルクスが自然史を観察するような正確さで確認できたことといえば、プロレタリア革命が、国家権力に対して「破壊力のことごとくを集中する」任務に到達したこと、国家機構を「粉砕する」任務に到達したこと、これだけであった。」498P・・・これは前出の第二版の追加稿も参照

(「一九一九年発行の第二版ではじめてつけられた。」501P の追加された節「3 一八五二年におけるマルクスの問題提起」500-2P・・・「マルクスの一八五二年三月五日付ワイデマ

イヤーあての手紙」500P——「(マルクス)「わたしが新しくやったことと言えば、次の諸点を証明したことだけなのだ。／(1)階級の存在は、生産の一定の歴史的発展段階 [historische Entwicklungsphasen der Produktion] だけに結びついているということ。／(2)階級闘争は、必然的にプロレタリアートの独裁をもたらすということ。／(3)この独裁そのものは、あらゆる階級を廃絶し、階級のない社会へ達するたんなる過程にすぎないこと。……」／(ここからレーニン)これらの言葉によって、マルクスは、第一に、先進的で最も深遠な考えをもったブルジョワジー思想家の学説と自分の学説との根本的かつ主要な相違を、第二に、国家についての学説の核心を、驚くべき鮮明さで表現することに成功している。」500P

「マルクス主義者とは、階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認にまでおしひろげる者だけをさしていう呼称である。」501P・・・レーニンのマルクス主義の定義、このことによってマルクス——レーニン主義を定立したと言えるのでは—

「日和見主義は、階級闘争の承認を、まさにその最も主要な点まで、つまり資本主義から共産主義への移行の時期まで、ブルジョワジーの打倒とブルジョワジーの完全な絶滅の時期にまで、おしひろげはしないのだ。／現実には、この時期は、階級闘争がかつてその例を見なかったほど激化することが避けられない時期であり、階級闘争がこのうえなく先鋭なかたちをとる時期なのだ。しかがつて、この時期の国家もまた、不可避的に、新しいやり方にしたがった [プロレタリアートと無産者一般にとって] 民主主義的であるあるような国家、そして新しいやり方にしたがった [ブルジョワジーに反対して] 独裁的であるような国家でなければならない。／さらに言おう。マルクスの国家学説の本質は、つぎのことを理解した人だけが、つまり一階級の独裁は、あらゆる階級一般にとって必要なだけでなく、ブルジョワジーを打倒したプロレタリアートにとって必要なだけでなく、資本主義を「階級のない社会」から、すなわち共産主義からへだてている歴史的時期の全体にとっても必要であるということを理解した者だけが、体得できたのだ、と。／ブルジョワ国家の形態はきわめてさまざまだけれども、しかし、その本質は一つ、これらの国家はすべて、その形態はどうであれ、結局のところ、かならずブルジョワジーの独裁だということだ。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、非常に豊富で多種多様な政治的形態をもたらさないわけにはいかない。しかし、そのさいでも、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの独裁のみであろう。」501-2P

「マルクスは、コミューンにさきだつ数ヶ月前の一八七〇年秋、政府を打倒しようとする試みは向こう水の暴挙であるあることを証明して、パリの労働者に警告を発した。だが、一八七一年三月、決戦を無理じいされて、やむをえずこれにこたえて立ちあがったとき、つまり放棄が事実となったとき、マルクスは、このプロレタリア革命を、不吉な前兆があったにもかかわらず、心から感激して迎えたのだった。」502P

『共産党宣言』ドイツ語新版の序文 (一八七一年六月二十四日付) で、二人は『共産党宣言』は「いまやところどころ時代遅れになっている」として、「……とりわけ、コミューン、次のことを証明した、すなわち、『労働者階級はできあいの国家機構をそのまま奪い取って、それを自分自身の目的にそって動かすことはできない』(この『』の中は、マルクスの『フランスの内乱』の中からの引用) ……」503P・・・ロシア革命はそのことを履行していな

い——秘密警察、トロツキーの旧軍人の登用など、更にスターリンの旧官僚などの登用
「ブルジョワジーおよびブルジョワジーの反抗を抑圧することは、依然として必要である。コミューンにとってこのことはとくに必要だった。」「ところで、ひとたび人民の多数者が自分の抑圧者をみずから抑圧する段になると、抑圧のための「特殊な権力」は、**もはや必要でなくなる！** この意味で国家は死滅しはじめる。」509P・・・ロシア革命ではそうはならなかったのです。そのことが総括の核心（自分たちが主張していたことの否定）。

「すべての公務員が例外なく完全に選挙で選ばれ、いつでも解任できるものとなること、彼らの俸給をふつうの「労働者の賃金」なみに引き下げること・・・」510P・・・この原則がレーニンのこれまでの官僚制度と違うとおいたところの核心だったし、レーニン自身はそれを実行しようとしたけれど、そもそもネップで資本主義社会の論理を導入したら、それは崩壊する必然性、解任するのは誰か——民衆やプロレタリアートであれば、中央集権制を否定する民主主義が必要なはず——現実には党の機関になった——書記局の支配体制

「小ブルジョワジーの他の階層のなかからと同じように、農民階級のなかからも、とるにたらない少数者だけが、「なりあがり」、ブルジョワ的な意味で「出世をする」。つまり、金持になったり、ブルジョワに転化したり、あるいは地位を保証された特権的官吏に転化する。しかし、およそ農民が存在している資本主義国なら [大多数の資本主義国はそうなのだが]、どの国でも農民階級の圧倒的多数は政府によって抑圧されており、政府打倒と「安あがり」の政府とを待望している。これを実現しうるのはただプロレタリアートだけであって、プロレタリアートは、これを実現することによって、同時に国家の社会主義改造への第一歩を踏み出すのである。」511P・・・レーニンは、農民は土地の私的所有を求めるといところで、小ブルジョワジーと規定したのですが、土地の私的所有ではない、ミールの位置をどのようにとらえていたのでしょうか？ また農民は階層であって階級ではないのです。土地所有といところで農民を階級として集約するのは、間違えていると言わざるをえません。農の持つ意味を押さえ損なっていたのでは、とも思ったりしています—とりわけ今日的には、農の位置を押さえ直す必要も感じています。

「「コミューンは、議会的な団体ではなく、立法府であると同時に執行府でもある行動的な団体たるべきものであった」のだ。」512-3P・・・決定と執行の一致——全共闘運動にも

「前世紀七〇年代のある機知にとんだ社会民主党員は、郵便事業を社会主義経営の見本と呼んだ。まさにそのとおり、今日の郵便事業は、国家資本主義的独占の型にのっとって組織された経営である。」516P「国民経済全体を郵便事業ように組織すること、しかもそのさい、技術者、監督、簿記係を、すべての公務員と同じように、武装したプロレタリアートの統制と指導のもとに「労働者賃金」以下の俸給で組織すること——これこそ、われわれの当面の目標である。」517P・・・俸給を同じにしたら資本主義ではないし、資本主義の論理を用いる必要もないのです。俸給を同じにするなら、そもそも俸給という概念をなくして、ベーシックインカムにできることです。

「マルクスがプルドンともバクーニンともくい違っているのは、ほかならぬ連邦主義の問題についてなのだ [プロレタリアートの独裁については言うまでもない]。無政府主義の小ブルジョワの見解からは、原理的に言って、連邦主義が出てくる。マルクスは中央集権

主義者だ。」520P・・・？

「マルクスは将来の政治的諸形態の発見にとりかからなかった。」522P（プロ独は手紙の中では書いていたのです。その中で、パリ・コミューンが起きたのです。）——「コミューンこそブルジョワ国家機構を粉砕しようとするプロレタリア革命の最初の試みであり、粉砕されたものにとって代わることができ、また、とって代わらなければならぬ「ついに発見された」政治形態である。」522-3P・・・コミューンやソヴィエトがなぜ国家になったのかの問題、中央集権制や暴力装置の問題、暴力は革命の助産婦にすぎない、力むのは母親——民衆自身　レーニンの外部注入論や前衛論は、民衆の自然発生的革命性に依拠していないのです。党——後衛論

「しかし、この国家廃止という目標を達成するために、われわれは、搾取者に対して国家権力という道具、手段、方法を、一時的であれ、利用することが必要だと断固として主張するものである。」327P・・・ここで必要なのは、武力がまだ必要とするならば、国家ではなくて、武装せる民衆ではないでしょうか？ 搾取者は私有せる生産手段をとりあげられた時点で、搾取者ではなくなるのです。

エンゲルスの、反権威主義者の「われわれが代表者たちに授けているのは、権威などではなくて一定の委任なのだ」の言に対する応答と、レーニンのそれに対するコメント「このように、エンゲルスは、権威と自由とは相対的な概念にすぎず、この概念の適用範囲は社会発展のさまざまな段階に応じて変化すること、この概念を絶対的なものとして考えるはばかげていることを指摘し、・・・・・・」528P・・・これは官僚主義をうみださないための基本的概念であって、相対的に容認することではないはずです。権威は差別に関するキーワードなのです。

「公的諸機能が政治的なものから単なる管理機能へと転化する問題、「政治的国家」に関する問題等々。とくに、誤解をまねく恐れのある後者の表現は、国家の死滅する過程をさしているのである。つまり死滅しつつ国家は、死滅の一定の段階では、非政治的国家と呼ぶことができるということ表現しているのだ。」329P・・・政治性をなくした国家なるものはありえないのです。「政治性をうしないつつある」国家という意味では？ これさえも国家というネーミングは違和があるのです。政治が消滅する以前に国家は消滅していること

「無政府主義者は、ほかならぬ革命を、その発生と発展の見地から、暴力、権威、権力、国家に対する革命の諸任務という見地から、見たがらないのだ。」329P・・・「権威」の原語からの確認の必要があるのですが、これは「革命党の権威」というところでの党の物神化と独裁論に結びついていくこと、ここからのとらえ返しの必要。信頼と権威は違うのです。

（エンゲルスのベーベルへの手紙）「・・・・・・プロレタリアートが、まだ国家を必要とするあいだは、それは自由のためではなく、自分の敵を抑圧するために必要とするのであり、自由について語るができるようになれば、すぐに国家としての国家は存在することをやめるのです。それゆえ、わたしたちは、（綱領のなかで）国家と書いているところはどこもみんな、フランス語の『コミューン』にぴったりの、むかしからある美しいドイツ語、『共同社会』[Gemeinwesen]という言葉で置き換えるように提案したいと思います。」

531P・・・どこで、コミュニオンやソヴィエトや共同社会が、国家にすり替わるのでしょうか？

「エンゲルスは、「人民国家」が、「自由な人民国家」と同様にナンセンスなものであり、社会主義からの逸脱でもあるというそのかぎりにおいて、無政府主義者の攻撃は正しいものだ」と認める。」532-3P——（ベーベルへ）「国家は、階級支配に立脚する国家から人民国家へと転化されなければならぬ。」533P・・・プロレタリア国家も同じ、これは労働者国家も同じ、ただし、労働者国家を標榜する労働者への抑圧国家は存在してしまっただけです。

「さて、国家の問題にもどろう。エンゲルスは、ここで、とりわけ貴重な三つの指摘をしている。すなわち、第一に、共和制の問題について。第二に、民族問題と国家制度との問題について。そして第三に、地方自治について。」535P

（エンゲルス）「およそこの世に確固不同なものがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級が、民主共和制という政治形態のもとにおいてしか支配権をにぎれないということだ。」537P・・・スターリン主義の下、真逆なことになってしまっただけです。

「エンゲルスは、マルクスと同様に、プロレタリアートとプロレタリア革命の見地から、民主主義的中央集権制をば、単一にして不可分な共和国をば主張している。彼は、連邦共和制は例外的なもの、発展の障害となるものと見なすか、さもなければ、君主制から中央集権的共和制への過渡として一定の特殊的条件のもとでの「一歩前進」と見なしている。そして、これら特殊諸条件のなかでは、民族問題が全面に出てくる。」538P・・・民主主義と中央集権制はアンチノミーのなるのではないのでしょうか？ 民族自決権と中央集権制も

「地理的条件、原語の共通性、そして何百年にもわたる歴史をもつイギリスでは、個々の小区域の民族問題などは「かたづけ」てしまっているかに思われるけれども、このイギリスでさえも民族問題は過去のものとなっていない明白な事実をエンゲルスは考慮に入れ、それゆえに連邦共和制を「一歩前進」と認めているのである。」539P

「エンゲルスは、この民主主義的中央集権制という概念を、ブルジョワ・イデオロギーや無政府主義者も含む小ブルジョワ・イデオログが使っているような官僚主義的意味合いで理解しているわけではけっしてない。エンゲルスの考えによると、中央集権制とは、コミュニオンと地方とによる国家統一の自発的な防衛のもとで、それとあらゆる官僚主義、上からのいっさいの「指導」の文句なしの追放を結びつけるような広範な自治制を排除するものではけっしてないのである。エンゲルスは、国家についてのマルクス主義の綱領的見解を発展させて、こう言っている。／「……だから、統一共和国ということになるのだ。・・・・・・・・」539P・・・世界革命的な実現があれば国家ということの消滅に向かうこと。なぜ、統一共和国という概念が必要になるのか。反差別論的に対峙している最大のことは「国家主義」ということです。これは、地産地消というところも含めた地方自治からせめあがる、しかも農業というサブシステムの産業の、現在農協という、機械や種や農薬・化学肥料というところから資本に収奪されていく構図を打ち破る協同組合的再編がいまこそ問われているのではないのでしょうか？ 民族差別ということも含めて、個別差別に関してはもし、前衛——後衛ということがあるとしたら、個別差別の民衆運動が前衛なのですが、その反差別運動は他の差別をとらえきれないという限界性があり、だから、差

別総体をとらえ返すというところに党の存在意義があるのです。ですが、そもそもマルクス派が差別ということをとらえきれなかった歴史性が続けられているわけで、そういう意味では、個別差別をつなぎ、反差別運動を支える後衛党として、とりあえず位置づけるしかないとも言いえます。レーニンのこのあたりの主張は中央主権制を一部否定しているようにも読み取れます。

「連邦共和制は中央集権的共和制より自由という見解は間違えている。」340P・・・連邦の個々の共和制の中味によるから、当然のこと

「(エンゲルスの『フランスの内乱』三版<1991年版>の序文)「コミューンはそもそものはじめから、つぎのことを承認しなければならなかった。すなわち、労働者階級は、ひとたび支配権を手に入れるや、古い国家機構をそのまま運営していくことはできないこと。そして労働者階級は、たったいま獲得したばかりの支配権をふたたび失わぬためには、一方で、それまで彼ら自身の圧迫に利用されてきた古い抑圧機構をいっさい除去すると同時に、他方で、彼ら自身の代議員や官吏に対して、一人の例外もなく、いつでも解任しうるものであることを宣言し、彼らから自分自身を安全にしておかねばならないこと。これらこそ労働者階級が承認しなければならなかったことなのだ。……」/エンゲルスは、君主制のもとにおいてだけでなく、民主共和制のもとにおいても国家は依然として国家としてとどまること、すなわち、国家は公務員、「社会の従僕」、社会の諸機関を社会の主人に転化される基本的特性を保持していることを、いくたびとなく強調している。」543-4P——エンゲルスの引用に戻り、「この転化をふせぐために、コミューンは二つのたしかな手段を採用した。第一に、行政、司法、教育上のいっさいの地位には、普通選挙権にもとづいて選ばれた者だけを任命し、しかも選挙民の決定によっていつでも彼らを解任できるように法律で規定したこと。第二に、地位の上下を問わず、すべての公務員に他の労働者に他の労働者が受けとっている額と同額の賃金しか支払わなかったこと。……………」544P・・・同一賃金にするためには、そもそも労働ということ自体を問い直す必要があります、資本主義の下ではなしえないのです。それは資本主義経済の否定ということのなかでしかなしえませんが、しかるにネップということを導入すれば、この原則は適用されなくなります。

「資本主義のもとではとことんまで徹底的な民主主義など実現不可能だし、社会主義のもとではどのような民主主義も死滅するだろうから。これはちょうど、髪の毛がもう一本だけ少なくなったら禿げ頭になるかならぬかという、古い笑話に類する詭弁にすぎない。」545P「民主主義をとことんまで発展させること、このような発展の諸形態をさがし求めること、これら諸形態を実践によって検証すること等々、すべてこうしたことは、社会革命をめざす闘争を構成する諸任務の一つだ。一つ一つをとれば、いかなる民主主義も社会主義ももたらしはしない。けれども実生活のなかでは、民主主義はけっして「一つ一つとられる」ものではなく、他のものと「いっしょにとられる」ものであり、それは経済に対しても影響を与え、その改革を促進するとともに、逆に経済的發展の影響もこうむる、等々。これこそ生きた歴史の弁証法というものだ。」・・・ここでいう「民主主義」は支配の形態としての民主主義のことです。対等な関係で議論し決定していく「民主主義」は(それを「民主主義」と表現するかどうかは別にして)、必要だし、そのような関係は作り上げていくことです。また、エンゲルスの弁証法の法則化批判はともかく、問題は官僚制をどう脱構

築するかということ。国家は軍事的統治機構と官僚的統治機構というところにおいて、官僚的統治機構が必要としても、それができあいの官僚機構ではないというところにおいて、選挙制と解任性ということがあり、それがいかに可能になるのでしょうか？レーニンよりもトロッキーの方が現実主義的になってしまっていて、ネップも軍事組織の旧軍隊からの登用をするなかで、できあいの国家機構は使えないという原則をくずしてしまった一選挙制や解任制は、党独裁というところですのでくずれてしまっています。これはレーニンの外部注入論的前衛党論からきています。民衆の革命性に依拠できない中で、党独裁に至ったこと自体が問題なのです。当時の民衆の革命性は、保守的だからこそ革命的だというところで、一時的なことでしかなかったことこそが問題なのです。むしろローザが民衆の革命性に依拠しようとしていたのです。けれど逆に自然発生性というところで、きちんとした「策略」をたてえず、虐殺されてしまいました。歴史の背理。今日的には多様な道筋から、社会変革の途を策っていくしかないこと、このことについては、「社会変革への途」で書き進めます。

「国家とは、階級支配をめぐる闘争で勝利を得たプロレタリアートに、遺産としてひきつがれる害悪なのに。勝利を得たプロレタリアート、コミューンがやったように、この害悪の側面を即座に切りとらざるをえないだろう。」346P

「民主主義は、少数者が多数者に服従するという原則と同一のものではないのだ。民主主義は、少数者が多数者に服従することを承認する国家、すなわち、一階級の他の階級に対する、住民の一部分の他の部分に対する系統的な暴力行使のための組織なのだ。」549P・・・レーニンは民主主義という概念を整理できていないのです。支配の形態としての議会制民主主義、民衆の「自己決定権」というところで機能する支配の形態としての民主主義と、それでも行政・立法・司法機構の選挙制や解任制度というときの民主主義をごちゃ混ぜにしています。だから中央集権制や党の独裁がもたらされたのです。選挙制や解任制を具体的にどうするのかというところで、そのことが問われたのに、そのことをスポイルしてしまいました。自己決定権は幻想であっても、無視はできないのです。

「しかし、われわれは、社会主義に向かって努力しつつも、その社会主義が共産主義へと成長転化するであろうこと、このことと関連して、人間一般に対する暴力行使の、ある人間の他の人間への服従の、住民の一部分の他の部分への服従の必要はいっさい消滅するであろうことを確信する。なぜなら、人間は、暴力なしに、服従なしに、社会生活の根本的諸条件遵守する習慣がついてくるだろうから。」549P

「マルクスのほうがエンゲルスよりも「国家びいき」であ」550P るように見えるところがある、が、何を主題に語っているかによって違いが起きているのであって——「エンゲルスは、ベーベルに向かって、国家に関するおしゃべりなどまったくやめ、国家と言う言葉を完全に放逐して、綱領から国家という言葉も完全に放逐して、それを「共同社会」という言葉に置き換えるようにすすめている。」550P・・・これだと今日的課題になる反国家主義が出てこなくなります。

「エンゲルスは、国家について流行している偏見 [ラッサールも、すくなくからずこの偏見にかぶれていた] がまったくばかげたものであることを、はっきりとすどく、太い線でベーベルに示すことを課題にしていたのであった。一方、マルクスは、他のテーマ、すな

わち共産主義社会の発展という点に関心を集中していたので、エンゲルスのとりあげているこの問題については、ことのついでに触れているにすぎないのだ。」551P・・・エンゲルスとマルクスの違いについてはもう少し検証が必要

「マルクスには、ユートピアをつくりあげたり、知ることができないことがらについてむなしい推測をめぐらしたりする気配は、ひとかけらもない。」551P・・・？

(マルクスの「ゴータ綱領」に関して)「だから、『現代国家』とは虚構の概念にすぎない。」552P・・・レーニン、マルクスの『ド・イデ』における国家の共同幻想の件を読んでいなかったとされるのですが、ここに同じような内容があります。問題は、差別排外主義による国家への国民統合ということ、そこから当然出てくる、国家主義批判が出てこないという問題を押さえねばならないと思うのです(スターリン主義として現れた一國社会主義建設路線による覇権主義の現実)。レーニン国家論が抜け落としていたこと—そこから出てくる暴力装置を粉碎するという単純な暴力革命論に至るのでは—

(承前)「『人民』という言葉と『国家』という言葉とを千回結びあわせたところで、蚤の一跳ねも問題の解決には近づきはしないのだ。」552P・・・「人民」と「国家」はアンチノミー

「日和見主義者たちによって現に忘れられていること、それは、資本主義が共産主義に移行する特殊な段階あるいは特殊な時期が、歴史上、疑いもなく存在しなければならぬ、という事情である。」552P・・・問題はそのスパンであり、その時期は民主主義が否定されるのかという問題なのです。この民主主義は支配の形態としての民主主義ではなく、民衆の意思としての民主主義

「以前には、問題は、つぎのように提起されていた、すなわち、プロレタリアートは自己の解放をかちとるためにはブルジョワジーを打倒し、政治権力を奪取し、みずからの革命的独裁をうちたてなければならぬ、と。／いまや問題は、やや異なった形で提起されている。すなわち、共産主義へ向かって発展しつつある資本主義社会から共産主義への移行は、「政治上の過渡期」を経過しなくては不可能であり、この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁でしかありえない、と。」553P・・・すべての株は、というより生産手段の私的所有は廃止されます。株式会社そのものがなくなります。労働者管理による生産組織に改編されます。自分や自分の家族や対等な関係における集団が管理できない土地や建物の占有は認められないのです。そもそもブルジョワジーはいなくなります。だからプロレタリアートという概念はなくなるので、プロレタリアートの独裁などもなくなります。そこまで至る期間は短期間になります。そもそも、現在社会でも、プロレタリアートという概念自体が崩壊してきています。それに代わることとして、マルチチュードという概念が出て来ています。だから、「独裁」という言葉が使われるのなら、被差別民衆による反差別独裁となるのです。この場合、そもそも「独裁」という概念は使われなくなるでしょう—プロレタリアートという概念は、労働力の価値によって分断されている民衆、そこにマジョリティの問題はあったので、そのマジョリティは食品汚染や環境汚染にさらされている住民という概念でも、それは被差別者という概念に、マルチチュードということに含まれます。「独裁」ということは政治的概念で、政治は廃棄されていくとしても、暫くは続き、マルチチュードという概念での運動は長く続いていきます。それこそが永続革命的文化革命

なのです。

「資本主義社会が最も順調な発展をとげる条件があるばあい、この社会は民主共和制という形で多かれ少なかれ完全な民主主義がある。しかし、この民主主義は、資本主義的搾取という狭い枠でたえずしめつけられているので本質的には、少数者だけの、有産階級のための、すなわち金持ちだけの民主主義に民主主義にとどまっている。・・・」553P・・・この後にギリシャの奴隷制とかとさほど変わりがないという話が出て来ます。しかし、普通選挙権が確立している国においては、むしろ「自己決定」とか「自己責任」とかいうごまかしが出て来ます。レーニンの時代の民主主義は、「本質的には」（根源的には）変わっていないのですが、いまだに王制なることが存続している国があり、それはいろんな形での「共同幻想」へのとらわれから来ているのです。その最たることが国家の「共同幻想」へのとらわれと言ええることではないかと思われまます。だから、国家主義批判とさまざまな差別主義的イデオロギーとどう対峙していくかが問われているのです。

「とるにたらない少数者のための民主主義、金持ちのための民主主義・・・・・・」554P
「貧乏人に対するこうした制限、例外、除外、妨害は、ちょっとしたことのように思われる。・・・・・・だが、これらもろもろの制限が総計されると、貧乏人が政治から、民主主義への積極的参加から排除し、おしのけることになるのだ。」554P・・・まさに巧妙な情報隠蔽・改ざん・操作ということの日本の政治が民主主義に何をもたらししているのかという現実

「マルクスがコミューンの経験を分析して、被抑圧者は抑圧階級のどの代表者が議会で自分たちを代表し、自分たちを踏みにじることになるかの決定を数年に一度だけ許される！」554P

「搾取者＝資本家の反抗を打ち砕くことは、プロレタリアート以外のだれにもできないし、また、独裁以外のどんな方法によってもできないからなのだ。」555P・・・ロボットが第二次産業を担う事態になってきて、労働の位置づけが変わってきて、更に環境問題とか「住民運動」が出てくるなかで、労働ということの位置づけが変わってきているのではないかとも思えるのです。むしろ矛盾はもっと総体的に広がり、そこでの運動が起きている中で、こういう考えも少し変わっているのではと言います。

「抑圧のあるところ、暴力のあるところ自由はなく、民主主義もないこと、これは明白だ。」555P・・・これは抑圧ということへの論理であって、それに対抗して運動する立場での民主主義は必要—これを取り違えると大変なことになります。それを取り違えたのがスターリン主義です。

(エンゲルスのベーベルへの手紙)「プロレタリアートは、自由のためでなく、自分の敵を抑圧するために国家を必要とします。そして自由について語りうるようになれば、たちまち国家は存在しなくなるであります。」555P・・・もし、必要となるならば(反革命クーデターは常道的に起きますから)そこで必要になるとすれば、それは軍勢力であって、国家ではないのではないのでしょうか？

「「国家は死滅する」という表現は、はなはだ選択の妙をえた言葉だ。というのは、この表現は、過程の漸進性も過程の自然成長性もあらわしているから。そして、習慣だけがこのような作用をおよぼすことができるし、また、疑いもなくおよぼすであろう。」556P

「もし搾取というものがなければ、もし人間を憤怒させ、抗議や蜂起を呼び起こし、鎮圧の必要を生み出すものがなにか一つなければ、人間は自分たちにとって必要な公共生活の規則を遵守することなどには、かんたんに慣れてゆくからだ。」 556P

「搾取者が人民を抑圧するためには、当然のことながら、きわめて複雑な機構なくてはその任務を遂行するわけにはゆかない。ところが、人民は、きわめてかんたんな「機構」のもとでも、いやほとんど「機構」がなくとも、たんなる武装した大衆組織 [さきまわりして言えば、労働者・兵士ソヴィエトのようなもの] によっても、搾取者を抑圧することができるのだ。」 557P

「最後に、共産主義だけが国家を完全に不必要なものにする。なぜなら、抑圧すべきものがだれもない、つまり階級という意味で、住民の一定部分との系統的な闘争という意味で「だれもない」からである。」——過渡的な必要性とその消滅「第一に、これをおこなうのに、抑圧のための特別な機構、特殊な装置は必要でないのだ。武装した人民自身が、簡単かつ容易にこれをやってのけるであろう。……第二に、我々は、公共生活の規則を破る不法行為の社会的根源が、大衆の搾取、彼らの困窮と貧困にあることを知っている。この主要な原因が排除されると同時に、不法行為は不可避免的に「死滅し」はじめるだろう。それがどれくらい急速に、そしてどんな順序で死滅するかは知らない。しかし、それが死滅するであろうことは知っている。そして、それが死滅するとともに、国家もまた死滅するであろう。」 557P……レーニンは国家の過渡的な必要性も書いているのですが、ここからはそれは国家でなくてもいいとしか読み取れないのです—

(マルクスの『ゴータ綱領批判』の引用)「……権利は平等である代わりに、不平等でなくてはならないであろう。……」 560P……ベーシックインカム (基本所得保障) でなくて、基本生活保障

「マルクスは、人間の避けがたい不平等をこのうえなく正確に考慮しているばかりでない。同様にまた彼は、正確に考慮しているばかりではない。生産手段を社会全体の共有財産に移す [ふつうの用語法によれば「社会主義」] だけでは、まだ分配の欠陥と「ブルジョワの権利」の不平等を除去するものではないこと、この権利は生産物が「労働に応じて」分配されるかぎり、支配しつづけることを考慮しているのだ。」 560P

(マルクス承前)「……共産主義社会の高度の段階では……社会はその旗にこう書くことができるであろう、『各人はその能力に応じて、各人にはその要求に応じて』と」 562P……そもそも能力という概念自体が、変換していくでしょう—

(いろいろな日和見主義者が)「社会主義を「導入」する等不可能などと言ったとき、彼らが念頭においているのは、まさに共産主義の高度の段階もしくは局面であって、こういう段階を「導入すること」など、だれ一人として約束しなかったどころか、考えたこともないのである。なぜなら、こういう段階を「導入する」ことなど、一般にできないことなのだから。」 564P

「マルクスの鮮明の偉大な意義は、彼がここでも唯物弁証法を、すなわち発展の学説を首尾一貫して適用し、共産主義を資本主義のなかから発展してきたものとして見なしている点にある。」 565P……後期マルクスは『資本論』草稿の中で、単線的発展史観から脱していました。「なかから」ではない共産主義的社会の研究もしていました。この「唯物弁証

法」というのはエンゲルスが弁証法を法則としてとらえ、その物象化からきているのではないのでしょうか？——検証

「民主主義とは平等を意味する。平等をめざすプロレタリアートの闘争と平等というスローガンとが、どんなに大きな意義をもっているかは、平等を階級の廃絶という意味に正しく理解するならば、明白である。しかし、民主主義は形式的な平等を意味するだけである。そして、いったん生産手段の占有に関する社会の全成員の平等、つまり労働の平等、賃金の平等が実現されるやいなや、ただちに人類のまえには、形式的な平等から事実上の平等に向かって、つまり「各人は能力に応じて」という原則の実現に向かって前進するという問題が、必然的に発生してくる。人類がこの最高の目標に到達する途上でどのような段階を通過するか、どのような実践的方策を講じるかは、われわれは知らないし、知ることもできない。」566P・・・これは一票の平等、形式民主主義の支配の形態から抜け出せない政治を語っています。民主主義とは民衆を主体にした、民衆のための政治、たしかに、政治が消滅すれば民主主義という概念もなくなることです。レーニンのエンゲルス弁証法の物象化的展開「量は質に転化する」

「民主主義とは国家形態であり、国家の一変種である。したがってまた、民主主義とは、あらゆる国家と同様に、人間に対して暴力を組織的かつ系統的に行使することである。これが楯の一面である。しかし、他の一面では、民主主義とは市民間の平等の形式的な承認を意味し、国家制度の決定とその統治に対する全市民の平等な権利の形式的な承認を意味する。このことが、またそれで、つぎのことと関連してくるのだ。すなわち、民主主義は一定の発展段階で、第一に、資本主義に反対する革命的階級、つまりプロレタリアートを団結させ、この階級がブルジョワ国家機構——たとえそれが共和制的なブルジョワ国家機構でも——を、常備軍を、警察を、官僚制度を打倒し、これをこっぴみじんに粉碎し、地上から一掃し、それらを、やはり国家機構にはちがいはないが、より民主主義的な、人民全体の民兵化へ移行しつつある武装せる労働大衆という形の国家機構ととりかえることができるようにするのだ。／ここで「量は質に転化する」。すなわち、民主主義のこのような段階は、ブルジョワ社会の社会主義的改造の開始と結合している。もしほんとうにすべての人が国家統治に参加するならば、資本主義などもはやもちこたえられないだろう。そして、資本主義の発展そのものが、またそれで、「すべての人」がほんとうに国家統治に参加できるための前提条件をつくりだすのだ。」566-7P

「計算と統制」567P・・・資本主義は教育ということを通して革命を準備します。同時に国家主義や競争原理などを通して差別主義も身につけさせます。その幻想をどう解体していくかの道筋も示す必要があります。

「だが、資本家に勝利し搾取者を打倒したプロレタリアートが、全社会にあまなくおしひろげんとするこの「工場」の規律は、けっしてわれわれの理想でもなければ、終局目標でもないのだ。それは、社会から資本主義的搾取の醜悪さ、悪辣さを根こそぎ一掃するために必要な、そしてさらに前進するために必要な、一小段階にすぎないのだ。／社会の全成員が、もしくはすくなくとも社会の圧倒的多数が、自分自身で国家を統治することを学び、この仕事を一手に引き受け、とるにたらぬ少数者である資本家や、資本家的習癖をもちつづけたがっている紳士諸君や、資本主義によって骨の髄まで腐り果ててしまった労働者に

対する統制を「軌道に乗せた」瞬間、その瞬間から、いっさいの統治一般に対する必要性は消滅しはじめる。」568P

「労働者は、政権を把握するや、古い官僚機構を粉碎し、一物も残さないほど根こそぎに打ち砕いてしまう。そして、これを労働者と勤務員からなる新しい機構で置き換える。彼らが官僚に転化するのを防ぐために、マルクスとエンゲルスによってくわしく探求された方策が即刻とられるであろう。その方策とは、つぎのようなものだ。／(1) (官僚の) 選挙制だけでなく、随時解任制／(2) 官僚に対しては労働者の俸給をこえない俸給を。／(3) すべての人が統制と監督の機能を遂行し、すべての人がある期間「官僚」となり、そのことによって、だれもが「官僚」になれなくなるような状態へただちに移行すること。」

576-7P・・・(3)は共産主義の高度な段階

「ところが、カウツキーは、マルクスの「コミューンは議会的な団体ではなく、立法府と執行府とを同時に兼ねそなえている行動団体であった」という言葉を深く考えていないのだ。／カウツキーには、[人民のためのものではない] 民主主義と [反人民的な] 官僚主義とを結合しているブルジョワ議会制度と、プロレタリア民主主義、すなわち官僚主義を根だやしにする諸方策を即座に採用し、これら諸方策をとことんまで、つまり官僚主義を完全に絶滅するまで、人民のための民主主義を完全に実施するまで遂行することができるであろうプロレタリア民主主義との違いが、全然理解できなかつたのだ。」577P・・・ここで二つの民主主義の違いが出てくるのですが、実際ロシア革命において、それが現実に差別化できていたのでしょうか？ 古い「官僚制」の粉碎はなしえたのかの問題 中央集権制とプロ民主主義の関係 党の独裁へと進む動き

(パンネクック)「プロレタリアートの闘争は、たんに国家権力を奪取するためブルジョワジーに対しておこなう闘いではなく、国家権力そのものに対する闘争なのだ。」379P・・・パンネクックとレーニンの違い——レーニンは国家はとりあえず必要←？ 今日的にはむしろ国家主義批判の必要

「マルクス主義者と無政府主義者との違いは、つぎの点にあるのだ。／(1)マルクス主義者は、国家の完全な廃絶を目標においてはいるが、この目標は、社会主義革命によって階級が廃絶された後、国家の死滅へとみちびく社会主義が確立されたその結果として、はじめて実現可能なものとなることを認める。ところが、無政府主義者は、国家を今日明日じゅうにでも完全に廃絶してしまおうと欲するが、この廃絶を実現する諸条件をば理解しない。／(2)マルクス主義者は、プロレタリアートが権力を奪取したのち、古い国家機構を完全に破壊し、それに代えるにコミューン型の、武装した労働者組織からなる新しい国家機構をもってすることが必要だと認める。ところが、無政府主義者は、国家機構の破壊を主張しながらも、破壊したあと、プロレタリアートは何をもってそれに代えるか、プロレタリアートはいかに革命権力を利用するかについて、まったく漠然とした考えしかもっていない。彼らは、革命的プロレタリアートによる国家権力の利用をば、プロレタリアートの革命的独裁をば、否定しさえする。／(3)マルクス主義者は、現代国家を利用することによって、プロレタリアートに対し革命の下準備にとりかかるよう要求する。ところが、無政府主義者は、これを否定する。」580P・・・なぜ武装した労働者組織が国家機構なのでしょうか？

「中央集権制は、古い国家機構をもってしても、新しい国家機構をもってしても、実現可能である。もし労働者が自発的に自分の武装力を一つに統合するならば、これは中央集権制であろう。しかし、この中央集権制は、中央集権的国家機関、常備軍、警察、官僚の「徹底的破壊」に基礎をおくであろう。」581P・・・破壊したものを、内容が違おうとしても、なぜ同じ形態でつくるのか、意味不明。形態が内容を規定するという側面を押さえ損なっているのでは？ ロシア革命からの検証も必要です。

「いま問題になっているのは、反政府派のことも政治闘争一般のこともない。革命そのものだ。革命とは、プロレタリアートが「行政機関」とすべての国家機関を粉砕して、それを武装した労働者からなる新しい機関で置き換えることにある。」582P・・・新しい機関がなぜ国家なのでしょう？

「革命とは、新しい階級が古い国家機関の助けを借りて命令し統治することではない。古い国家機構を粉砕し、新しい国家機関の助けを借りて、命令し、統治することでなければならぬのだ。」582P・・・なぜ国家機構にこだわり続けるのか？ 軍をもち中央集権制で外部が存在するという設定からなのでしょう？

「マルクスが、ほかならぬコミュンを例にとって示したように、社会主義のもとでは、官僚の選挙制を実施するだけでなく、さらに彼らに対する随時の解任劇をも実施し、さらにまた彼らの労賃を労働者の平均水準まで引き下げ、さらにまた議会制機関を「立法府であると同時に執行府でもある行動的機関」で置き換えることを実施するにつれて、役員は「官僚」であることをやめ、「官吏」であることをやめるのだ。」583P・・・三つのことがあれば官僚主義ならぬけれど、問題はどのようにして三つを実現するのでしょうか？

SNS の投稿から

2020.2.18 論理や倫理もない話

ここもう数年も論理や倫理もない同じことが繰り返されています。

黒川検事長の定年延長問題で、安倍首相は「解釈を変えたのは、森法務大臣だ」と言い出しました。責任体系がどうなっているのかも分からないのでしょうか？ いつも「最高責任者は私だ」と言ってきたことも忘れたのでしょうか？ またいつものようなごまかしの常套手段も出て来ました。「コロナウイルスで大変なときに、こんな話をしているときではない」という世論操作に動いているようです。簡単な話です。「大変なときだから、政治を停滞させてはならない」と、混乱させているひとたちが辞めればすむ話なのです。

やじ首相はやじを「謝罪」しました。いつものように「謝罪」のときは、書いてもらった原稿の棒読みです。平気ですそをつけるひとに「謝罪」させても意味がありません。最近テレビで安倍首相を見ると、ひとりで突っ込みを入れています。論理も倫理もないことへの批判のようなことを書くのは疲れます。まあ、それが現実で、どうにかしなくてはいけないから、いろいろ書き続けています。

2020.2.26 コロナウィルス問題コメント

昨日の TBSB 報道 1930 で自民党の議員が、丁寧に説明するとか、できるだけ早く新検査法の導入を検討するとか言っていました。専門家会議は、1～2週間がかぎと言っているのに、説明するとか検討するとか言っているときではないと思います。行動するときなのです。一体政治はどうなっているのでしょうか？

このウィルス問題の一番の難点は、検査法を広く適用できていないということにあるのです。「4日様子を見てから」とか、指針だしているけど、死んだひとは手遅れになっているのです。検査法が出ていて、すぐに対処できるはずなのに、一体どうして行動に移さないのでしょうかー

コロナウィルス問題① 拡散希望

まず、実際に起きている感染症対策は政局の問題にすることではないと思います。そもそも、いろいろ追及されているときに、「コロナウィルスの問題が起きているのに、他のことを議論している時ではない」ということ自体が、政局にしていることなのです。「他のことを議論しているときではない」というのなら、追及されているひとが、追及されていることを凍結して、自分が辞任することによって、超党派で対策に動いていくことです。そもそも、政府の対応を見ていると、それ自体が大きな政局になることですが、その対処の仕方の不備一責任の追及は、コロナウィルスの問題が収束してからにするしかありません。ちゃんと責任をとらないから、こういう自体になっているのですが、すでに最高責任者は、他のひとにこの対策を任せて、自分は他の自分がひきおこした問題に対処しているので、とりあえず同時的にやっていくことです。問題は、任せられている感じのひとが、同じようなあいまいな態度をとっていることや、省庁を超えた対応ができていないということがあります。

コロナウィルス問題②

政府の出している指針が意味不明です。専門家会議が1～2週間の対応がカギと言っているのに、まだ、その指針の十分な説明をしていきますとか、検査を民間委託して検査態勢をつつていくという提案に、「検討します」ということを与党議員が言っています。そもそも、あいまいな指針を出すことが間違いなのです。説明の問題ではありませんし、行動するときなのです。

コロナウィルス問題③

一番の問題は検査体制のようです。政府が1日三千人の検査ができると言っているのに、実際の検査が、はるかに少ない人数になっています。民間委託すれば1日九万人はできるようになるという数字も出ています。そして、実際に当てはまるようなひとが検査を受けられない事態もあります。すでに、武漢から帰国したひとの検査や、船に閉じ込めていた

ひとたちの検査基準と今の検査態勢が矛盾を来たしています。感染症対策の基本指針は「正しく恐れる」ということにあるようです。「高齢者や持病をもっているひとが危ない」とか言っていますが、北海道の若いひとが重篤になっているという情報が流れています。それに合わせて、きちんと分析をし直し、その情報を流し、周知徹底させ、理解を求めて行くことが必要です。そもそもインフルエンザで一年に一万人亡くなっているということからすると、そのレベルの対応に収束できることのように見えますが、そもそも一万人も亡くなることで、感染症対策がきちんとなされていなかったことが問題だと思います。それは収束後の話で、きちんと改めてみんなが議論に参加し、問題意識を共有化できる感染症対策を考えていくことです。

2020.2.29 コロナウィルス、小中学校(編集註)休校要請後の記者会見

コロナウィルスでの、小中学校一斉休校要請後の首相記者会見がありました。記者の質問にペーパーを読みながら答えていました。やらせではないでしょうか？ 信じられないのです。

そもそも情報の整理がなんにもなされていないのです。今、力をつぎ込むのは、検査態勢の整備であり、被害が大きく出る病院、高齢者施設への留目のはずなのです。そして、相談施設の整備(今は保健所)で、きちんと対応できる相談体制を作ることです。そんなことを考えると、そこに働く小中学生をもつ親が、学校の休校でどうなるのでしょうか？ いろいろなシュミレーションが考えられますが、学校を休校にしてわざわざ濃厚接触の場をつくることにはならないのでしょうか？ 親が、学校が休校になっている子どもの世話を、感染の広がりを見て自宅に居ようとする祖父母に頼み、交通機関を使って感染の恐れを犯し、しかも濃厚接触の場に来ることを頼む、そんなことを考えていたら、一体なにを考えてこんな処置をしたのか分かりません。とにかく、弱い立場のひとたちにしわ寄せもたらず処置です。

(編集註) 小中学校だけでなく、高校・特別支援学校も含むようです。以下、本文も含めて校正するところですが、原文のままにしています。

(編集後記)

◆月刊発刊だったのですが、巻頭言がタイムラグを起こし、しかも、読書メモも溜まっているのでしばらく、月二回態勢です。次回は3月18日。

◆今回の巻頭言、もう、問題を根底的にとらえて、根底的な改革をというところで、何回かの情勢的などころでの読書メモと連動しています。タイムラグが生じているので、唐突感があるのですが。

◆「読書メモ」、ちょっと間を空けたレーニン学習の続き、社会科学的な本を読み始めた最初の頃に読んだ本、もう最初の頃にレーニンはいらなかったのですが、それでも「社会変革志向の運動がどうしてこんなに衰退していったのかを押さえるには、レーニン批判が必要になって、一連の読書の後に、主著二つです。

- ◆「SNSへの投稿から」は、コロナウイルスの問題は政局にしないという流れで歯切れが悪くなってしまいました。で、それにしても、安倍首相は「責任」という言葉がすきで、学校休校の要請後の会見でも何回口にしたでしょう？ 「責任」者という名誉はわたしにあるけど、責任はとらないという発想のようです。どうしても意味がわかりません。もう一つ、発信していたのですが、収まりきれなくなって、次回に回しました。
- ◆「社会変革への途」は原稿がふくらんだので今回はお休みです。早く復活させたいのですが。
- ◆このところ原稿を溜めていて、編集するだけになっていたのですが、バタバタしていて、やっとのことで予定に間に合わせました。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 A

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>